



丸井 浩 (MARUI Hiroshi)

東京大学大学院人文社会系研究科 教授
(インド哲学仏教学研究室)

東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業、
同大学院修士課程修了、
博士課程単位取得退学。
博士 (文学)。

東京大学大学院博士課程修了後、文部省給費留学生としてインド・プーナ大学サンスクリット高等研究センターに留学およびインド哲学仏教学、比較思想学の世界的巨匠、中村元博士創設の「財団法人東方研究会」専任研究員を経て、1992年東京大学文学部印度哲学科助教授、1999年から現職。

専門は、仏教とは別系統の、インド（ヒンドゥー）の哲学的思索の伝統を、サンスクリット原典の厳密な解読を通じて解明することである。特に中心は、インド論理学の発展に寄与したニヤーヤという学問（ニヤーヤ学派）の研究である。これまで研究成果はほぼすべて専門誌等に掲載された学術論文の形だったが、最近ではインドの哲学的思惟を原典解読しつつ研究する今日的な意義について考える機会も増えてきた。

世界各地の古典（宗教聖典ないし哲学・思想文献が中心）を研究することが、人類の未来社会の展望につながるのではないかという問題意識のもとに、「古典精神と未来社会分科会」という組織を日本学術会議の中に立ち上げ、活動を推進する中心メンバーとなっている。また、持続可能な地球環境・社会、という今日最もアクチュアルな関心事の一つとなっている問題に、インドの哲学的思索あるいは仏教思想の伝統が、どのように関わりうるのか、という問題意識を起点として、「サステイナビリティと人文知」という企画（東京大学総長裁量経費 2009～2011年度）の実施責任者を務める。

主な書籍・論文に『ジャヤンタ研究 ―中世カシミール文人が語るニヤーヤ哲学―』（山喜房佛書林、2015年3月）、「宗教伝統の権威論証とインド哲学：護教論理と寛容思想」『一神教の学際的研究』研究成果報告書（同志社大学、2007年）、「論証式における upanaya の意味について―初期ニヤーヤ学史再構成に向けての一資料―」『印度学仏教学研究』（2005年3月）、「インド哲学史の一常識を見直す―Jayanta が言及する「六タルカ」の意味」『平成 14～16年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)中世インドの学際的研究（課題番号 14201003）』研究成果報告書（2005年3月）など他論考多数。

日本学術会議連携会員、日本印度学仏教学会理事長、公益財団法人 中村元東方研究所常務理事、財団法人仏教学術振興会評議員などを歴任。